

十一月八日

ワークショップ三日目、藤森照信レクチャー。藤森照信は日本の近代住宅史を用意してくれたが、たつての願いで建築家藤森の建築論をお願いすることにした。最近作も含めて自作を論じてもらうことにした。建築することの祝祭性の話しが新鮮であった。鈴木博之のラスキンのレクチャーのうち労働の質、つまり喜びという話しを遠くのものとして聞いた者には、それが藤森の建築の中に不思議な形で存在することに気付いただろうか。

千村文彦君のための各種装置を考え始める。ワークショップ参加者の身体障害者の一人だ。身体の延長としての建築の第一歩。コンピュータのキーボードをヒットするために口にくわえた棒を使っている。そのためのマウスピースや釣竿のピースを転用したワリバシ状の棒、そしてキーボードに接触するための小指の先くらの部品、これらは彼にとつては身体の延長としての器具だ。それ等のモノを丹念にデザインしてみることを試みてみよう。何がわかる筈だ。午後千村君のグループにショートレクチャー。サンパウロ大学でのワークショップの体験を話す。あのリオデジャネイロから来た女学生、まぶたが垂れ下がってくる病気の人のための眼鏡をデザインしていた女性はその後どんな風に仕事を展開しているのだろうか。マリア・セシリアもサンパウロ大学で相変わらず頑張っているだろうか。

夜の講義は宋久庵憲司さん。道具と家について語っていただく。

宋久庵さんの話しは西欧型の論理にのつたものではなく、東洋の、時に仏教のニュアンスをベースにしているもので、いつ聞いても新鮮だ。天井と壁と床は不自由だと断言したのが面白かった。つまり道具あつての空間だと考えているのだ。宋久庵さん流に言えば家は道具の収蔵庫だということになる。少しずつ彼の道具論がいかに建築をそして建築論を包摂しようとする意図を持つものであるかがわかってきた。ある新しい分野を作った人間の情熱の大きな形をみる思いがする。茶室は道具の容れ物だと言う指摘も面白かった。たしかに茶室は茶碗や釜や茶筌等が主役の舞台セットでもある。

ヨルク・グライター、ドイツより到着。明朝ホテルのロビーで会う事にする。

十一月十一日 日曜日

九州宮崎市へ日帰り行。ここ二日は日記をメモする時間も無かった。九日は松村秀一講義。彼のレクチャーも日進月歩で少しずつ進化している。住宅を作る世界の仕組みを読み解きながら、そこに歴史観が入っているところが他の東大内田研究室の人たちにはないところだ。市場機構補完の方法という概念が今回初めて出てきた。そして松村の予測では、高度な加工能力のパースナル化、高度な加工能力の国内余剰、そして国際流通の現実の中で世界を知ることが大事だとする。このあたりの認識は私の考えとほとんど同じなのだが、何かが大きくすれちがっているような気がする。松村は国家の枠を保持するシステムとしての産業というブットイ尾底骨を保持しているが、私は世界を生活者（消費者）を基本的な単位として、できうる限り考えようとしている。

夜の講義は山本夏彦翁。やっぱり人気があつて、会場は超満員

になった。真面目と正義は困りものという持論をとかくこの世はダメと無駄の語り口で話した。会場に発生し続けた笑いの質は仲々のものだったように思う。とすればまだ見込みはあるのかね。講義のあと会食、ゆかいだったと一言。一夜を楽しんで下さっただろうか。八十五才というから怪物だな。

十日は梅沢良三講義。G・エツフェルのマリア・ピア鉄道橋、ギヤラビ鉄道橋そして、それらの統合としてのエツフェル塔を巡る講義。梅沢さんは橋をやりたくて仕方ないのが良くわかった。

ヨルク・グライターの講義は非常に面白かった。ニューヨークをゴシック都市であるとして、ワールドトレードセンターの廃墟にゴシック聖堂を見ようとす。そしてヨーロッパモダニズムは廃墟への熱烈な関心から生み出されたとする。ピラネージの廃墟好みはピラネージのテクノロジーへの関心と表裏一体だと言う指摘もあった。日本には廃墟はない。故に日本のモダニズムとヨーロッパのそれとは全く異なるものだと言う。磯崎の有名な孵化過程のモニタージユは日本に廃墟が無いことの認識とそれに付け加えられていた橋のような絵は不在を補完する日本テクノロジーであるとも指摘した。グライターの理屈も日進月歩に進化中でスリルがある。私も停滞するわけにはいかない。

夜の講義は宮本茂紀さん、椅子の話し。

グライターのレクチャーは英文のレジユメを再読する必要がある。

そして、今日十一日の宮崎行。講演会。具体の元永定正さんと会った。七九才の関西人。現代つ子ギヤラリーも上手に使われていて、具体の連中の良い拠点になり始めているようで安心した。もう、へ口へ口に疲れて夜半帰宅。現代つ子ギヤラリーのデッサイ奴をやりたい。